

## 聖日礼拝説教要旨 【2012年10月14日】

### 「一つの望みを」

イザヤ書  
エペソ人への手紙

第44章21節～23節  
第4章1節～16節

説教 岡村 恒牧師

私たちは1つの望みを指して召された者です。「召す」と言う言葉は、身と魂の全てが、呼ばれた場所にやって来て、そこに存在することが求められるという意味です。私たちが召されたのには目的があり、それは一つの所に向かっているのです。

エペソは地中海の街で繁栄した通商の要所です。至る所に何々の神への祭壇、何々の神を祭る祠が沢山あったようです。神々と呼ばれるものに祈願して人々は生きていました。様々な人間の欲望が、偶像の前で吐露され、犠牲が捧げられたようです。人々はそれぞれバラバラに願望を抱いていました。

しかし神は、主イエス・キリストを通して私たちが一つに結び付けて下さいました。一つの体があって、一人一人がその肢体だと言う言い方が出てきます。教会で行われる聖餐礼典、パンと葡萄ジュースと一緒にいただくあの食卓で私たちは、一つの命を共有していることを確認して歩んでいます。

「召しにふさわしく歩きなさい。」これは主イエスが弟子たちに語られた言葉と重なります。エペソ人への手紙4章2節から3節にかけて7つの勧告がありますが、これはいずれも主イエスの姿を思い出しながら言われている言葉です。

主イエスは徹頭徹尾、神の前に身を小さくされた方です。聖書が語る罪とは、神の前に自分を大きくすることです。神を超えて自分の人生をコントロールできるかのように思いこむ傲慢さが、私たちの罪の根底にあります。だからこそ、主イエスは、十字架の上で殺されてしまう程まで自分を小さくして下さいました。

柔和であり寛容を示しなさい。主イエスは言われました。主イエスが激しく怒られたことは本当に数回しか聖書に記されていません。いつも柔和であられました。深い愛を持って、自分の頬を打ちたたかむ者を受け入れ、赦して忍耐されました。やがて天に昇られる前に聖霊を私たちに送って下さり、私たちが神と深く結び付けて下さいました。

幼い日には人生は単純だったかもしれませんが。しかし成長し、いろいろな価値に触れていくと、自分の中に多様な思いと様々な願いや欲求が生まれてたように思います。しかし実は、人間は生まれた時から、神に背中を向け、神との一致からかけ離れていきます。それが私たちの現実の姿であります。

神の愛に答える信仰も、神の約束にすがりつく力も私達人間にはありません。だから主イエスを地上に送り、私たちが神との一致に招き入れて下さったと聖書は宣言します。主イエス・キリストを自分の救い主として信じ、神に向かって歩むようにされたとき、私たちは『ひとつ』と言う言葉で集約される生き方に入っていきます。からだは一つ、御霊も一つ、一つの望みに私たちは召されている。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。」(4章5節) リズムの良い言葉が古代教会で讃美歌の様にして歌われたのです。

この讃美歌は、洗礼を受けたいと願う者を神に結び付ける言葉です。主イエス・キリストの霊が洗礼を受けた者の中に定住して、一緒に生きて下さいます。代々の教会はそう信じて洗礼式を執行してきました。洗礼を受けた者は、一つの洗礼、一つの信仰によって、お一人の方に結び付けられるので、一つの命と一緒に生きる。一つの希望を握りしめて、一緒に一つの終わりを目指して歩んで行く。これが、洗礼のたびに確認された信仰者への約束です。

主イエスは、陰府(よみ)にも降りて行かれました。これは、どんな人も一度もイエス・キリストの福音に触れることなく裁かれることはない、福音が聞かされなかった場所など世界中のどこにもないという話です。すべての人が、救いの約束の中へと、一つの望みに生きようと招かれているのです。

どのような人生が与えられているとしても、主にあって私たちは一つの希望を握りしめて、終わりの日に向かって歩いて良いのです。やがて終わりの日、主イエスがもう一度地上に立たれ、神が用意して下さいました新しい天と新しい地が完成します。この約束は確実なので、代々の教会は日曜日ごとに神をほめ讃えて礼拝をしてきました。

自分自身の中にも、分裂や矛盾を抱えている私たちが本当に完全な姿になる。これも終わりの日の約束です。その完成を目指して、私たちは歩んでいますが、それを実現して下さいるのは神ご自身であり主イエス・キリストです。終わりの日に完成をするまでは、私たちはなお多くの課題を抱えています。常に主イエスの霊が働いておられます。私たちは一つの望みを抱いて結びつけられ、完成の時を目指して歩んでいます。これは神の奇跡です。

(記 説教要約奉仕者)